

# コーヒーカップ形土器雑考

肥後弘幸

## 1. はじめに

弥生土器は、その形から壺・甕・鉢・高杯そして器台の五つの器種に分類して説明されることが多いが、分類とは別に用途が不明なことも相まって現在の食器など、日常見慣れたものの形状にちなんで愛着をもって呼ばれる土器がある。なかでも後期に、東海地方を中心に盛行するワイングラス形土器(高杯)は馴染み深い。同時期の丹後地域にも、コーヒーカップに似たなんとも洒落た造形の鉢(鉢D)が存在する<sup>(注1)</sup>。その特徴は、玉葱状の体部と円板を貼り付けた様な突出した底部及び縦向きの半環状把手という形状、薄い器壁、砂礫を含まない精良な胎土と全面ヘラミガキからなる丁寧な調整である。筆者は、1986年の冬に舞鶴市志高遺跡でこの愛くるしい土器(27)と遭遇し、いたく愛着を覚えた。以来、他の精製土器(壺E)とともに注目してきたものの、未だその用途等について良く理解できていない。本稿では、現状での認識を漠然と述べることで稿を進めていきたい。なお、丹後地域の後期の高杯及び一部の器台も胎土が極めて精良でヘラミガキ調整を多用する精製土器であるが、特に断らない限り、本文で述べる(小型)精製土器とは区別している。

## 2. 丹後地域における主要な出土例

久美浜町橋爪遺跡SD 21 II層(1~4) SD 21は幅3.5m・深さ0.6mを測る溝状遺構である。II層には後期中頃の遺物がまとまって含まれており、丹後の基準資料の一つとして評価されている。コーヒーカップ形土器(1)は、底部を欠くもので、やや外反気味に終わる口縁部の外面に浅い3条の擬凹線文を施す。2・3も玉葱状の体部を持つ精製土器である。コーヒーカップ形土器が無頸壺に近いのに対して、長い直立気味の頸部が付く長頸壺(壺Ea)で、2は突出する底部を持ち(壺Ea1)、3は筒状の脚柱部とラップ状に開く裾部をもつ(壺Ea2)。後期初頭の大宮町大谷遺跡第7主体の出土例(5)は、壺Ea2の祖形と想定できるものである。4は相伴資料として抽出した体部と頸部の長さがほぼ1対1を測る丹後地域通有の長頸壺である。

大宮町左坂15号墓第12主体(6~9) 15号墓は後期中頃の台状墓で、大小13の埋葬施

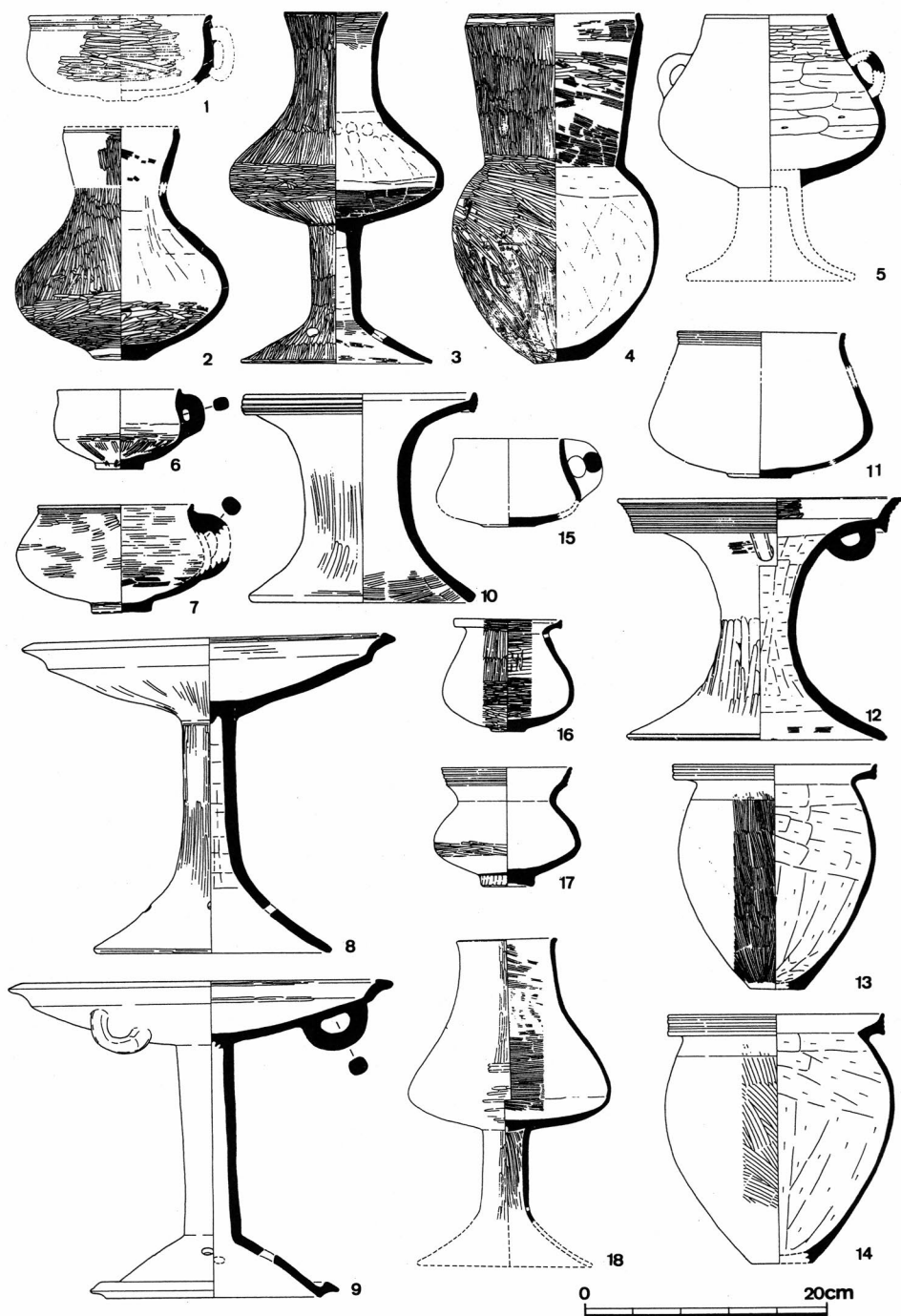
設が検出された。第12主体の棺内からは刀子1点、緑色凝灰岩製管玉3点及びガラス小玉62点が出土した。口径12.7cm・器高9.0cmを測るコーヒーカップ形土器(7)は、墓壙内破砕土器供献されていたもので、やや扁平な体部に短く外反する口縁の外面に2条の浅い擬凹線文を施す。内面に赤色顔料が付着しており、中に朱が入っていた可能性<sup>(注2)</sup>がある。6・8・9は、墓壙上に供献されていたものである。コーヒーカップ形土器(6、口径10.0cm・器高6.6cm)は、完形で出土した。小振りで直立する口縁部を持つ。ほぼ同時期と位置づけられる第10主体からは、墓壙内から破砕土器供献された甕が、墓壙上から器台(10)が出土している。丹後での器台の出現はおおむねこの時期である。

丹後町大山墳墓群(11~18) 大山墳墓群は、後期前葉から後葉にかけて営まれた台状墓群及びその周辺埋葬施設群で、計47基の埋葬施設が検出されている。コーヒーカップ形土器は計3点出土しているが、周辺第13主体例(11)を除くといずれも小片である(15ほか)。11は口径14.0cm・高さ約11cmを測るやや大型のもので、墓壙上から器台(12)及び高杯とともに出土した。墓壙内からは、墓壙内破砕土器供献に伴う甕(13・14)が出土している。棺内に副葬品はない。コーヒーカップ形土器を除く精製土器には次のものがある。台付き長頸壺(壺Ea2)は、8号墓第1主体(18ほか)をはじめ計5基の墓壙上面から出土しているが、その多くが破片資料である。周辺14主体出土の16は、コーヒーカップ形土器の口縁を上方に伸ばし、屈曲する頸部と短い口縁部からなるもの(壺Eb1)である。一对の紐孔があり、蓋が付く。弥生時代中期の近畿中部~北部に広く分布する同形の精製土器が小型化したものであろうか。17も精製土器である。

大宮町アバタ遺跡流路下層資料(19~24) 流路跡の最下層から木包丁や桶などの木製品とともに完形に復原されるものを多く含んだ後期中葉の土器群が出土している。コーヒーカップ形土器(19)は、口径10.8cm・器高7.5cmを測る。橋爪遺跡同様、ここでも壺Eaとセットで存在する。20の小型器台も精製土器である。

岩滝町大風呂南1号墓第3主体(25) 25は、ガラス釧1点・銅釧13点・鉄釧11振が出土した第1主体北西の第3主体に墓壙内破砕土器供献されていた。口径8.7cm・器高7.2cmを測り、やや器高が高い傾向にある。口縁部外面に浅い3条の擬凹線文を加飾する。第1主体の土器(26)などから後期後葉と位置づけられる。なお、2号墓第1主体部の墓壙上でもコーヒーカップ形土器の細片が出土している。

弥栄町西小田古墳群S X 03 西小田4号墳の墳丘裾部からコーヒーカップ形土器、器台(大小各1)、及び甕・壺の小片が出土している。コーヒーカップ形土器は、やや扁平で口径14.5cm・器高7.3cmを測る。隣<sup>(注3)</sup>の2号墳の下層から弥生時代後期の土器棺が出土しており、古墳に先行する弥生墳墓が存在した可能性が高く、供献された土器群と考えられる。後



第1図 コーヒーカップ形土器及びその関連資料1 (各報告書から転載)

- |                    |                     |                  |
|--------------------|---------------------|------------------|
| 1～4. 橋爪遺跡SD 21 II層 | 5. 大谷遺跡第7主体         | 6～9. 左坂15号墓第10主体 |
| 10. 同第12主体         | 11～14. 大山墳墓群周辺第13主体 | 15. 同周辺第4主体      |
| 16. 同周辺第14主体       | 17. 同3号墓第1主体        | 18. 同8号墓第1主体     |

期後葉に位置づけられる。

舞鶴市志高遺跡岡安地区包含層(27・28) 後期中頃～後半の包含層から浅い擬凹線文を施したコーヒークップ形土器(27)が、他の多くの土器(28ほか)とともに出土した。口径11.4cm・器高8.7cmを測る。また、土坑S K 86256からも小片が出土している。

加悦町須代遺跡(29～32) 環濠と考えられる溝内上層から中期中頃～後期後半の多量の土器とともにコーヒークップ形土器が出土した。口縁外面に擬凹線を施すものと施さないものがある。30は口径12.3cm・器高9.3cmを測る。

宮津市桑原口遺跡(33～35) 後期後半～古墳時代前期の遺物に恵まれた遺跡で、過去3回の発掘調査で、いずれもコーヒークップ形土器が出土している。33に見られるようにやや小振りで口径に対してやや背が高いのが特徴である。壺E(34・35)も出土している。

網野町浅後谷南墳墓(36・37) 後期後半～末に営まれたおよそ25×28mを測る方形台状墓の墳頂部からは大小9基の埋葬施設が検出された。鉄剣2振が出土した第2主体出土の36は、やや大型の台付き無頸壺(壺Eb2)と報告されているが、その形状はコーヒークップ形土器に近い。このほか、短剣を副葬した第6主体から、精製土器として蓋付きの台付き小型壺(37)が出土している。同様の形状を呈し、体部を2条の突帯で飾るものが、後期末の弥栄町太田4号墳下層土坑から出土している。

大宮町古土井遺跡(38～40) 全長4mにわたって検出した幅2mの流路内から完形個体を含む36個体の後期末の土器が出土した。この内の1点がコーヒークップ形土器(38)である。なお、器種構成は、壺3点・甕20点・蓋1点・鉢10点・高杯2点である。

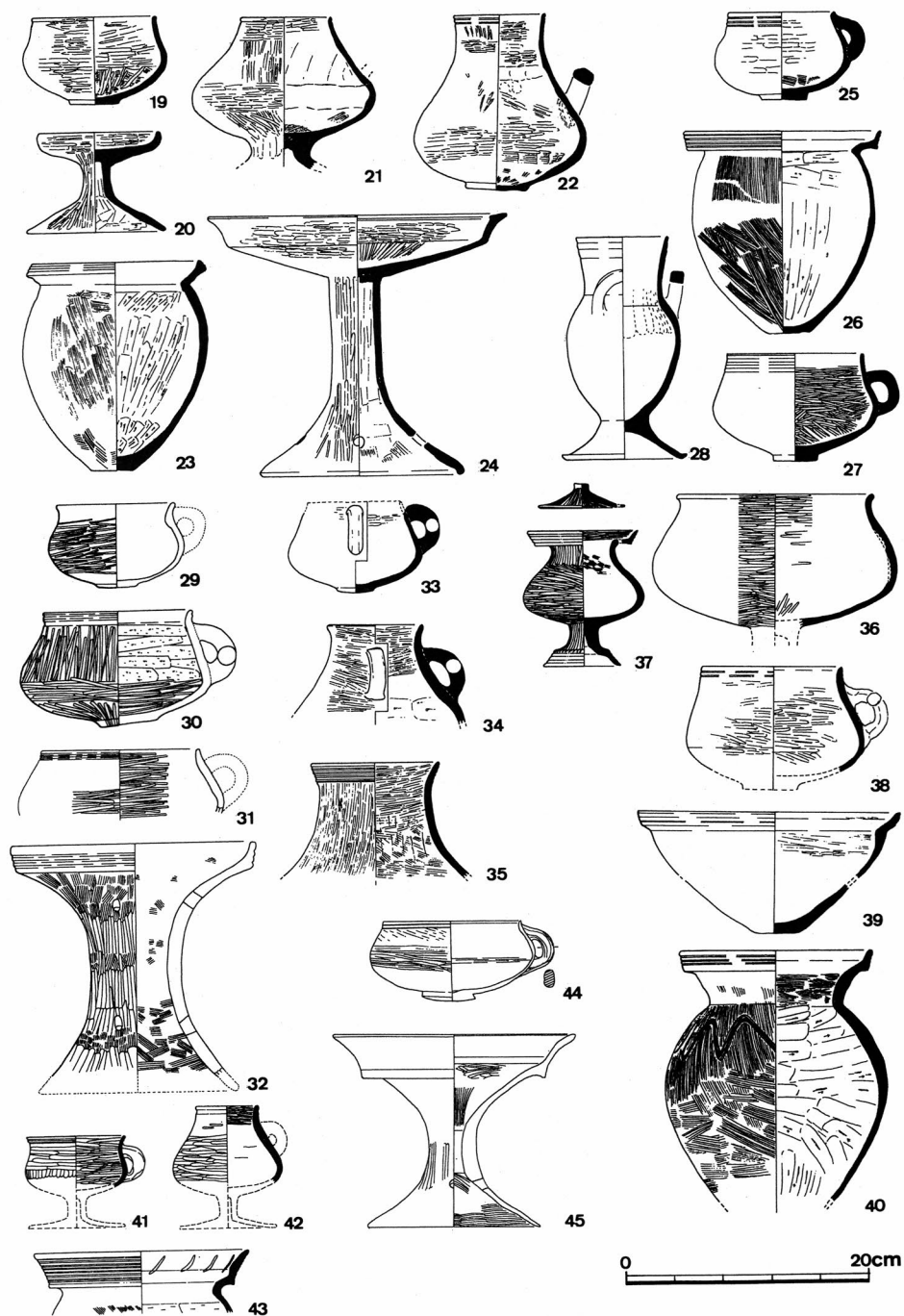
久美浜町橋爪遺跡I M区黒褐色粘質土層(41～43) 北陸地方搬入土器である月影式の甕(43)とともに、小型化した精製土器(41・42)が出土している。

舞鶴市桑飼下遺跡(44・45) 1973年の調査で包含層から出土したもので、丹後地域での初出ではなかろうか。調査例が少ない時代のため、時期不明とされている。

ほかに峰山町古殿遺跡、大宮町裏陰遺跡、野田川町西谷4号墓、舞鶴市桑飼上遺跡、同浦入遺跡等での出土例が知られている。

### 3. 丹後の出土事例の特徴

丹後地域に出土事例の多いこの鉢は、器台の普及と時期を同じくして後期中葉に出現するようである。墳墓遺跡では、器台がコーヒークップ形土器の周辺から出ることが多く、器台とセットで使用された可能性は高い。その場合、後期初頭の大谷遺跡出土例に見るように早くから成立した台付き長頸壺(壺Ea2)と同じ用途を目的として成立したのであろうか。用途としては、左坂15号墓の例が朱壺の可能性を暗示している。後期中葉は、後期初頭に



第2図 コーヒーカップ形土器及びその関連資料2 (各報告書から転載)

19～24. アバタ遺跡流路跡下層

25. 大風呂南1号墓第3主体

26. 同第1主体

27・28. 志高遺跡岡安地区

29～32. 須代遺跡

33～35. 桑原口遺跡

36. 浅後谷南墳墓第2主体

37. 同第5主体

38～40. 古土井遺跡

41～43. 橋爪遺跡IM区

44・45. 桑飼上遺跡

盛行した墓壇内破碎土器供献の変容期にあたり、従来全ての器種(調理容器の壺・甕及び飲食容器の鉢・高杯・器台)が墓壇内に破碎土器供献されていたのが、飲食容器は墓壇埋め戻し後に墓壇上に破碎供献されることが多くなる。ところで、この土器は、出土位置が墓壇上か、墓壇内かに定まる傾向にない。左坂15号墓第12主体では両者から出土し、西小田では墳丘上から、大風呂では墓壇内及び墓壇上から出土している。調理容器・飲食容器の両方の要素を兼ねているのかもしれない。なお、この土器が墓専用土器でないことは、集落からも他の精製土器とともに出土する例が多いことから明らかである。

#### 4. 他地域のコーヒーカップ形土器

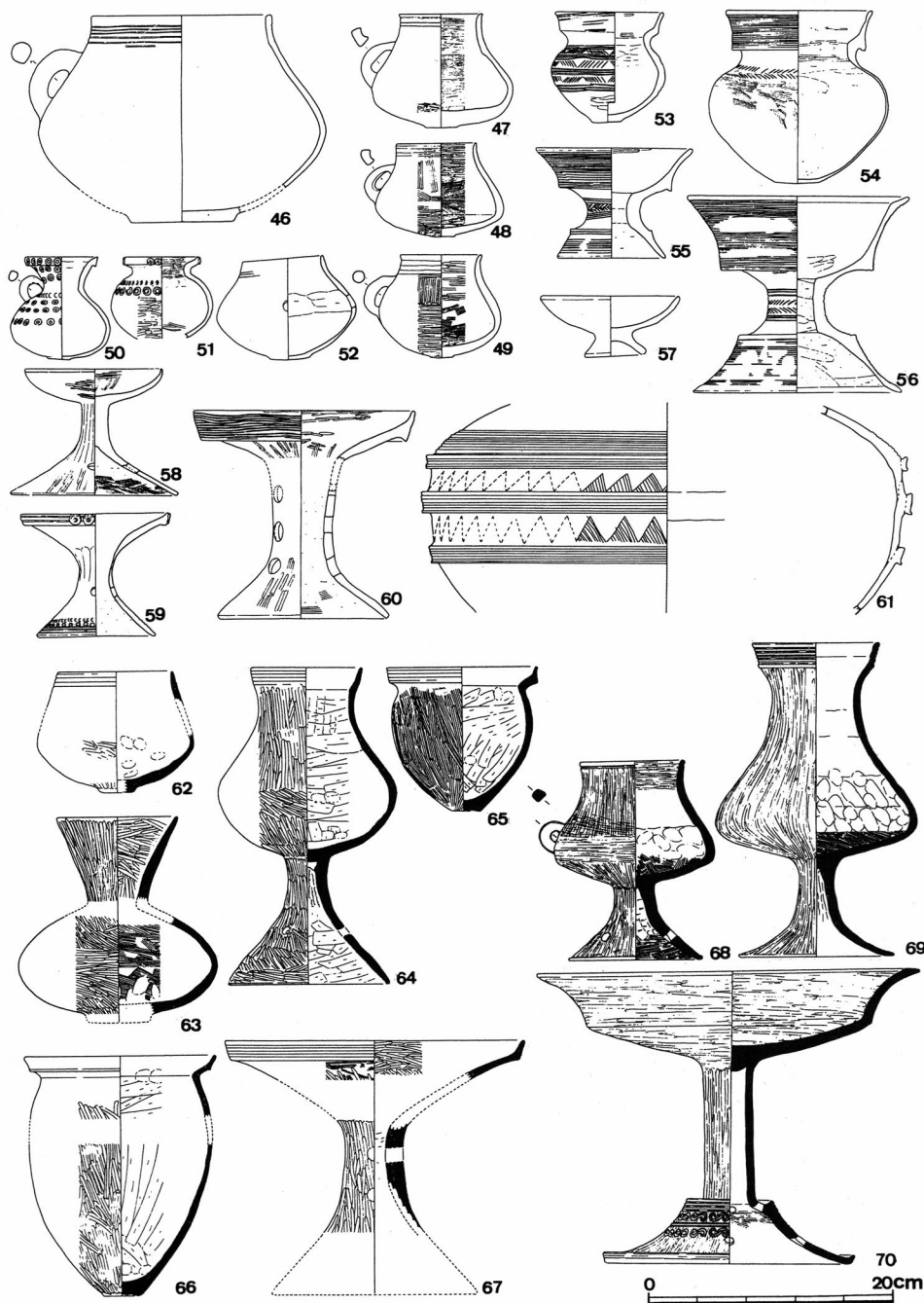
日本海側の3遺跡の出土土器を紹介したい。<sup>(注4)</sup>

出雲市西谷3号墓第1主体(46~61) 西谷3号墓は、出雲最大級の四隅突出型弥生墳丘墓で、東西40m・南北30m・高さ4.5mの規模(突出部を含まない)を測る。1983~92年にかけて調査が行われ、中心的な埋葬施設(第1主体、第4主体)の墓壇上から多量の供献土器(それぞれ100個体、200個体以上)が出土した。その内、約2/3が出雲在地の土器(53~57)で、20数個体が吉備からの搬入土器(61)である。<sup>(注5)</sup> 残りの約1/4の土器群について、丹後ないしその周辺、但馬から越前にかけての土器との類似性が指摘されている。転載したもの内、筆者が丹後地域等からの搬入土器の可能性を指摘できると思えるのは、47~49であり、報告書にも記されているように精製土器でない(砂粒を含む)46・50~52は、模倣された土器と考えたい。なお、第4主体部出土のコーヒーカップに長い脚部がつくものも同様に模倣されたものと考えたい。

豊岡市鎌田・若宮4号墓第7主体(62~67) 若宮4号墓は、7.5×4.5mの平坦面を確保した台状墓で、中央部の第7主体を囲むように計11基の木棺墓が検出された。第7主体(63・65)を含む5基で墓壇内破碎土器供献が行われ、第7主体の墓壇上で10個体以上の土器(62・64・66)が出土した。台付長頸壺(壺Ea2、64)とともにコーヒーカップ形土器(62)が出土している。丹後出土のものに較べてやや高く復原されているが違和感は覚えない。

墓制の上で、但馬は北丹波とともに丹後を中心とした近畿北部の文化圏の中にあり、両地域では、今後も出土例は増えるものと考えられる。北丹波においては、綾部市久田山遺跡に出土例が知られる。

鯖江市西山4号墳(68~70) 丘陵上に位置する四周の切れる方形周溝墓状の墳墓である。68~70は、東側の周溝内から一括して出土した。68は、コーヒーカップ形土器と台付き長頸壺(69)との折衷様を示す。70の法仏2式とされる高杯とともにいずれも精製土器である。若狭・北陸地域においては、後期後半に台付き無頸壺(ワイングラス形も含む)<sup>(注6)</sup>が盛行し、丹



第3図 コーヒーカップ形土器及びその関連資料3 (各報告書から転載)

46～61. 出雲市西谷3号墓第1主体

62～67. 豊岡市鎌田若宮4号墳第7主体

68～70. 鯖江市西山4号墳

後の台付き無頸壺(壺Ea)との境界があいまいである。

#### 4. おわりに

コーヒーカップ形土器(鉢D)について類例を紹介してきたが、その出現背景、役割については不明な点が多い。出土地の中心である丹後を含む近畿北部は、①墳墓の立地(丘陵上)と形状(階段状の台状墓)、②埋葬施設の構成(家族墓)、③墓壙内破碎土器供献と呼ぶ独特の土器供献儀礼、④鉄製品・玉類の副葬指向という点で墓制としてまとまりのある地域で、筆者はそこに大きな文化的・政治的まとまりを想定している。その独特の墓制は、独特の土器供献儀礼を伴うことから、その中心的役割を担う儀器が誕生する可能性が高かったはずだが、その気配はうかがえない。現状では、独特なコーヒーカップ形土器も後期中頃に出現し、ほとんど変化せず、後期末には小型化して消滅するようである。冒頭にあるように長らく課題としてきたことについて稿を進めたが、コーヒーでも飲みながら、弥生時代後期後半に存在するコーヒーカップの目的・意味を語れる状況ではない。今後の展開に期待したい。

(ひご・ひろゆき=京都府教育庁指導部文化財保護課主任)

- 注1 紙面の都合上、本文で使う器種名については、拙稿「丹後地域の弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年(上)―弥生時代後期―」(『太邇波考古』第7号 両丹考古学研究会 1995)による。
- 注2 野田川町西谷墳墓群で小型精製壺に、朱を中に入れ高杯で蓋をしてあった状況を実見させていただいた。
- 注3 三好博喜「西小田古墳群発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注4 資料を実見する機会を与えていただいた渡辺貞幸、故魚谷鎮弘氏に記して感謝を述べたい。
- 注5 渡辺貞幸『「出雲連合」の成立と再編』(『出雲世界と古代の山陰 古代王権と交流7』) 1995
- 注6 鯖江市持明寺遺跡での鉢Dの出土例について、赤澤徳明氏から御教示いただいた。

#### 出典

1～4・41～43『埋蔵文化財発掘調査概報1981』京都府教育委員会、5『大谷古墳』大宮町教育委員会(1987)、6～10『埋蔵文化財発掘調査概報1994』京都府教育委員会、11～18『丹後大山墳墓群』丹後町教育委員会(1989)、19～24『埋蔵文化財発掘調査概報1990』京都府教育委員会、25・26『大風呂南墳墓群』岩滝町教育委員会(2000)、27・28『京都府遺跡調査報告書第12冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター(1987)、29～32『須代遺跡第1次発掘調査概要』加悦町教育委員会(1988)、『火口遺跡・須代遺跡Ⅱ発掘調査報告書』加悦町教育委員会(1992)、33～35『京都府遺跡調査概報第82冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター(1988)、36・37『京都府遺跡調査概報第84冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター(1998)、38～40『埋蔵文化財発掘調査概報1992』京都府教育委員会、44・45『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』平安博物館(1975)、46～61『山陰地方における弥生墳墓の研究』島根大学法文学部考古学研究室(1992)、62～67『豊岡市鎌田・若宮古墳群』豊岡市教育委員会(1990)、68～70『西山古墳群』鯖江市教育委員会(1987)